

# 大蔵流狂言台本に見る擬音語・擬態語の特徴 ― 虎明本と山本東本との比較から ―

中 里 理 子

## はじめに

狂言資料に多くの擬音語・擬態語が見られることは、従来の研究で数々の指摘がなされている。小山（一九六〇）は狂言資料の言葉について解説した中で、「「つらりと」「めつきめつきと」「によりりによりりと」のような感覚を表現する副詞も

大蔵流三本（虎清本・虎明本・虎寛本）の擬音語・擬態語の異同について、抄物や天草版平家物語の擬音語・擬態語と併せて列挙したものである。大蔵流狂言に見られる擬音語・擬態語の全体像を把握することはできるが、特徴を詳しくまとめたものではない。

狂言には多く、「きつと」「つつと」などは感覚語に類似した表現としても用いられている」と述べているが、これら「感覚を表現する副詞」及び「感覚語に類似した表現」は、いわゆる擬音語・擬態語に当たるものである。また安田（一九八一）は「狂言を特色づけることばとして擬声語・擬態語があげられるであろう」と述べ、「抄物も擬声語・擬態語が目につく資料であるとされるけれども、使用率から見れば、狂言（虎明本）におけるそれは、抄物の中で最大の『襟帯集』よりも大なのである」と指摘している。しかしこれらの指摘がある一方で、狂言の言語研究は口語発達史の視点から語法や特定の語彙を考察するものが中心となっており、擬音語・擬態語は特徴の一つとして触れられるに留まっている。狂言資料の擬音語・擬態語に

そこで本稿では、狂言台本の擬音語・擬態語を取り上げ、語彙というまとまりとしてではなく個々に詳しく見ること、狂言台本で使用された擬音語・擬態語の特徴をまとめたかと考える。筆者は先に大蔵流山本東本に見られる擬音語・擬態語の特徴を整理し、その使用効果を考察した<sup>注1</sup>。本稿では、大蔵流虎明本の擬音語・擬態語調査を加え、山本東本との比較から、時代の変遷と共に擬音語・擬態語の使用が変化していった様相を見ていきたい。また、大蔵流の原点である虎明本の擬音語・擬態語の特徴をまとめることで、大蔵流虎光本、鷲流など諸本に見られる擬音語・擬態語と比較するための一資料になることも目的としている。

## 一 大蔵流虎明本と山本東本

焦点を当てた研究はほとんど見当たらず、管見の限りでは、佐々木（一九七一）が見られるのみである。佐々木（一九七一）は、

大蔵流虎明本は、寛永十九年（一六四二）に大蔵虎明によつ

て書写されたもので、大蔵流の台本筆録として最古のものであるとされる。今回調査対象としたのは、池田廣司・北原保雄『大蔵流虎明本狂言集の研究 本文篇』上・中・下巻（表現社・一九七二（八三））である。ここに納められたもののうち、脇狂言之類三二曲、大名狂言類三三曲、賀類・山伏類二七曲、鬼類・小名類三八曲、女狂言之類三三曲、出家座頭類三五曲、集狂言之類三三曲、計二三一曲から擬音語・擬態語を抽出した<sup>注2</sup>。台詞部分に見られた擬音語・擬態語は延べ語数で五一七語、異なり語数一九三語であった。ト書きと注の部分に見られた擬音語・擬態語は延べ語数で一〇四語、異なり語数六二語であった。台詞部分とあわせて延べ六二一語、異なり二五五語を収集した。

山本東本は、小林（二〇〇〇）によると幕末から明治初年の成立・書写となっており、時代がかなり下った時期のものである。調査対象としたのは、小山弘志校注『狂言集』上・下巻（岩波書店日本古典文学大系・一九六〇）である。脇狂言一〇曲、大名狂言十二曲、小名狂言二二曲、賀狂言六曲、女狂言十二曲、鬼山伏狂言十七曲、出家座頭狂言十七曲、集狂言十四曲、計百十曲から擬音語・擬態語を抽出した。台詞部分に見られた擬音語・擬態語は延べ語数で九八〇語、異なり語数二五九語であった。なお、ト書きについては「底本にはト書きがほとんど記されていない」ため「山本氏の説明に従って、あえて読む者の立場で校注者において挿入した」と解説に書かれており、現代語による記述となっている。従って、ト書き部分の擬音語・擬態語は考察の範囲から外すことにした。

大蔵流狂言の言葉について考える場合、小林（二〇〇〇）に

あるように、従来の研究では「筋書・台本定着期を代表する虎明本・虎清本と台本固定・伝承期を代表する虎寛本との相違」を見るのが基本とされてきた。本稿でも虎明本との比較に当たっては虎寛本を取り上げることが望ましいのだが、資料を手する便宜の事情もあり、今回はさらに時代が下った山本東本と比較することにした。山本東本は時代が離れているためにより完成された台本になっており、両本の特徴の違いも明確に見て取ることができる。

## 二 「末広がり」に見る虎明本と山本東本の違い

詳しく比較するに当たって、まず両本に大きな違いが見られることを「末広がり」の台本で確認したい。任意に四カ所を抜き出し、擬音語・擬態語には波線を付した。

（一）都に上る太郎冠者の台詞

「虎明本」

終に都へのほつた事が御ざらぬ、見物がてら、一段の事で御ざる、参程に都ぢかくやらにぎやかなよ、参程に上りつゐた、さりながらはつたと失念いたひた、すゑひろがりは、どこもとにあるといふ事とひもいたさひで、不念な事をいたひた、

「山本東本」

某もかねがね、都を見物致したい致したいと存ずるところに、このたびはよいついででござる。ここかしこを走り廻り、ゆるりと見物致そうと存ずる。いや都近うなつたやら、殊の外にぎやかになつた。さればこそ、はや都へ上り着いた。また田舎とは違つて、家建ちまでも格別な。あれから、つつとあ

れまで、<sup>見送</sup>仲よさそうに、軒と軒とをひつしりと建て並べたほどのにの。これはいかなこと。みどもは無念なことを致いた。末廣がりと申すものは、いかようなもので、また、どこもとにあるをも問わずに参った。

(二)すっぱ登場場面の台詞

〔虎明本〕

洛中に住居いたす心もすぐになひ者で御ざる、いなか者とみえて、わつばと申、あたつてみうと存る、

〔山本東本〕

これは洛中を走り廻る心も直にない者でござる。あれへ田舎者とみえて、何やらわつばと申す。ちと當つてみようと存ずる。

(三)末廣がりを説明するすっぱの台詞

〔虎明本〕

地紙とは此ぢかみの事、随分よひかみではつておじやる、又ほねにみがきをあてゝとは、此ほねの事、一本をしなのどくさ、むくの葉をもつて七日七夜づゝみがひておじやる程に、ずいぶん念がいつた、又、かなめしつかとゝは、此かなめの事なり、此ことくにいたせは、いづかたへもつてまいつても、ゆつすりともいたさぬ。

〔山本東本〕

まず第一地紙ようとはこの紙のこと。よい天氣に、よい紙をもつて張つたによつて、はじけばこの「とく、こんこん致す。また骨にみがきをあててというも、この骨。ものの上手がとくさ・むくの葉をもつて、七日七夜みがいたによつて、撫ず

ればこのごとくすべすべ致す。またかなめもしつととしてというも、このかなめのこと。<sup>前へ出</sup>これをこう致いて、いずかたまでも持つて参つても、ゆつすりとも致さぬ。

(四)果報者と太郎冠者のやりとり

〔虎明本〕

(果報者)しかと汝はそれをかふてきたか(太郎冠者)なかくかうてまいつた(果報者)なむさんぼうぬかれてきたよ

〔山本東本〕

果報者ウーン、すれば汝は、それを眞實末廣がりじゃと思つて求めて来たか。太郎冠者末廣がりでござるによつて求めて参りました。果報者ぬかれおつた。

これらに見るように、山本東本に比べて虎明本は台詞が簡潔にしか示されておらず、擬音語・擬態語の出現度も少ない。例えば(一)の都の描写や(三)の末廣がりの描写を見ると、山本東本ではいくつかの擬音語・擬態語を効果的に使つて表現しているが、虎明本では淡々とした説明に終わっている<sup>注3</sup>。特に山本東本にある都の描写「あれから、つとあれまで」「仲よさそうに、軒と軒とをひつしりと建て並べた」は多くの台本に用いられており、一種の定型的表現となっている。

一方で、虎明本にしか見られなかったものもある。(一)の「はつたと」、(四)の「しかと」がそうであるが、特に「しかと」は山本東本ではあまり使われておらず、虎明本に特徴的な擬音語・擬態語の一つである。山本東本では定型的表現とならなかつたものとして、次項で取り上げる。

（二）この「わっばと申す」は両本に共通しており、どちらの台本にも多く見られる表現である。虎明本の頃から確立していた定型的表現であったと思われる。

以下、定型的表現を中心に、虎明本と山本東本の違いを具体的に見ていく。

### 三 虎明本と山本東本の比較

先に挙げたように、虎明本で収集した擬音語・擬態語は述べ語数も異なり語数も山本東本より少ない。ただし、台詞部分の擬音語・擬態語をト書きや注で補っている場合も多いため、虎明本についてはト書きと注の擬音語・擬態語も見ていく。

#### 三・一 擬音語

狂言台本には鳥獣が多く登場し、それらの鳴き声が鳴き真似として演じられる。虎明本には次のような台詞部分の鳴き声が見られた。（≧ ≧内はト書き。）

- ・ 申付はやと存る、きやくくくくく（「猿聲」）
- ・ ほおん ≧≧ふくろのまね ≧（「梟」）

他に、「きつきつと（猿の声）」「かたかた（キツツキ）」「ほろろ（雉の声）」が見られるが、「かたかた」は連歌の付け句の一部、「ほろろ」は「ほろろをかける」という当時の慣用句として用いられており、いずれも臨場性はない。また、謡曲の中に「こんくわい（狐の声）」「ちりちりやちりちり（浜千鳥の声）」が見られたが、これらも慣用的表現である。台詞部分にはこのような擬音語しか見られないが、ト書きや注には次の

ように鳴き声の指示がいくつも見られる。

- ・ いぬ、わんくといふてかみつかふとする（「犬山伏」）
- ・ 女はばけがあらはれてから、こんくといふてにげいる（「吹取」）
- ・ キツネノナクマネヲシテ、クワイくト云（「釣狐」）

他に、台詞で「はやからすが○なく」（筆者注：○は本文に注が付けられている印）と書かれており、注に「コカくト」と指示されている例（「花子」）もある。また、台詞に鳴き声等が示されずにト書きで「には鳥のまねにてとまる（「鶏聲」）」とだけ指示されているものもあり、役者の即興的演技に委ねられていることが窺える。

山本東本では、台詞の中でさまざまな鳥獣の鳴き声を表す擬音語が見られた。

- ・ コウコウコウコウ、コキヤア、コウコウコウ（鶏の声：「鶏聲」）
- ・ ヒイヨロヨロヒイヨロヒイヨロヒイヨロ（鳶の声：「蟹山伏」）
- ・ クワイ、クワイ、クワイと鳴いて（狐の声：「釣狐」）
- ・ 蚊の精 プーン（「蚊相撲」）

「鶏聲」では例に挙げたような鳴き声が五カ所書かれているが、「コウコウコウコウ、コキヤアコキヤアコキヤアコキヤア」など、わずかず異なる記述がされている。実際には役者によって鳥獣の鳴き声がいきいきと模写されていたと推測されるが、基本的な鳴き真似が台本として指示されている点が、虎明本と

は異なっている。

人の音声を表すものでは、虎明本に笑い声「からからと」「どつと」、くしゃみ「くつきめくつきめ」、制する声「しいしい」、口笛「すうすう」「べうべう」、騒ぐ声「わつはと」が見られた。笑い声は「どつと御はら(笑)ひなされ候処に(「右流左止」)」「からくとおはら(笑)ひ候へは(「右流左止」)」のように説明として用いられており、臨場的な笑いを表すものではない。この点は山本東本も同様で、「どつと」という説明描写としての笑い声は見られるが、劇中で笑い声を発する場面には擬音語の指示はなく、役者の演技に委ねられている。また、前項で見たように両本に共通して多用されていたのが「わつはと(わつぱと)」である。全て「わつはと申す/言う/仰る」の形で用いられ、虎明本では計一二曲に一七例、山本東本では計一〇曲に一二例が見られた。虎明本の頃に既に確立されていた定型的表现であろう。

動物・人の音声以外の物音を表す擬音語を比べると、山本東本では大きな音に「グワラグワラ」「グワラリグワラリ」、小さな音に「サラサラ」「サラリサラリ」を使って典型的に表現している例が見られた。

・蔵の戸をあけて参ろう。(中略)グワラリ、グワラリ、グワラリグワラリ、グワラグワラグワラグワラ。と戸をあける形をして(「棒縛」)

・ヒツカリヒツカリ、グワラリグワラリ、グワラグワラグワラ  
ラグワラドー(「神鳴」)

・サラサラサラサラ と中央から正先にかけて戸をしめる形をして パツタリ(「節分」)

・あのお掛け物を引き裂かしめ。(中略)サラリサラリ、パツタリ。と引き裂く形をする(「附子」)

右の例に見るように、山本東本では、蔵の重い戸は「グワラ」「グワラリ」で、普通の引き戸は「サラ」で表現を分け、同様に雷のような大音量は「グワラ」「グワラリ」、掛け物を引き裂くような小さな音は「サラリ」で表している。

虎明本を見ると、雷は「ぐわらくく、ひかり、く、ぐわらくくどう(「雷」)」となっており、ほぼ同じような形で山本東本まで受け継がれていることがわかる。しかし、虎明本では雷以外に「ぐわら」「ぐわらり」という擬音語は見あたらない。

「さら」系を見ると、「さらさら」は戸を開ける音が二例、「さらりさらりと」は数珠をもむ音一例、布施を海に撒く音一例が見られた<sup>注4</sup>。数珠をもむ音は「からりからりと」も見られ、虎明本では音に関する表現がさまざまであることが見て取れる。

他にも、例えば「雷」(山本東本は「神鳴」)の中で、天から落ちて腰を打った雷に医師が針を打つときの表現を比べると、虎明本では「ずう」、山本東本では「グワツシ」が使われている。

「グワツシ」は物を打つ音として他曲にも見られ、音の響きも「グワラ」に通じているが、「ずう」は他曲には例がなく、独特の擬音語である。山本東本で音の表現の類型が見られるのに対し、虎明本では音に関する表現が固定されていないと言える。

### 三・二 擬態語(一) 感情を表す語

先に山本東本を調査した際、浄瑠璃や歌舞伎の脚本に比べて、喜怒哀楽に関わる心情、体の感覚を表す擬態語が少ないことを

確認した。「うじうじとしたなり」「たじたじととする」など心情を窺わせる動作を表すものは除き、心情を表現するものに以下の語が見られた。

心がくわつくわつといたす／さつぱりと快くなる／さめざめと落涙する／しょんぼりしょんぼりと植える（謡）／すきと合点する／すぞすと帰る（謡）／心がせいせいとする／ぞうぞうとつかみたてらるるような恐ろしさ／にこりにこりと笑いかける／にっここと笑う／びっくりといたす／ほろりと涙がこぼれる／むかと腹が立つ

虎明本では、右の語以外に「うつかとなる」「心がくわつと致す」「しどろもどろの細道（謡）」「しみく／＼と談合」「すつきりと致す」が見られたが、台詞部分に見られた語はほぼ山本東本と同じであった。

### 三・三 擬態語(二) 虎明本で多用された語

この項では、虎明本で多く見られた擬態語七語（きつと・くわつと・しかと・つつと・とうど・むさと・ゆるりと）について、山本東本と比べていきたい。

#### 【きつと】

「きつと」は「うしろをきつと見てあれば」「あのみゝのきつとしたは」など鋭い動作・様態を修飾するものが六例、「きつと仰せ付けられひ」「きつと推量してあるぞとよ」など確かな行動、素早い行動を表すものが一一例見られた。後者は擬態語としての描写性が前者よりも薄れており、強調表現としての働きのがあると思われる。

山本東本には「きつと」は四三例あった。「きつと見合わせ」「きつと捕らえ」など鋭い動作や様子を表す例が一二例、「きつと叱つてござれば」「近々にはきつと算用致しましょう」のような強調表現としての「きつと」が三一例見られた。強調表現のうち二四例が「この御礼はきつと申しましょう」「きつと叱つて下されい」という意志・命令の形と呼応して使われており、「きつとく意志／命令」は山本東本で定型的表現の一つとなっている。

#### 【くわつと】

台詞部分には計一四例見られ、そのうち、「くわつとした歌」「くわつとしりぞきて」のように大きく広がる様子や動作を描写するものが四例、「くわつとふちをせうぞ」「くわつとへらさう」のように十分に何かを行う様子を表すものが一〇例見られた。後者は擬態語としての描写性が前者の例よりも薄れており、強調表現としての働きをされていると思われる。

山本東本では「くわつと」が二〇例あり、そのうち、「口はくわつと耳せせまで裂けてある」のように大きく広がる様子を表すものが六例、「くわつと取らしよう」など強調表現にあたるものが一四例見られた。強調表現の中には「まずはお声から致いて、くわつとお大名と聞えまする（今参）」「くわつと御立身なさりよう（止動方角）」のように、虎明本よりさらに擬態語の描写性が薄れている例が見られた。

#### 【しかと】

虎明本には「しかと」が三二例見られた。他の擬態語と比べて頻度が高く、次のような形式で使われている。

- ・わたくしも、しかとは覚へませぬ（「筑紫の奥」）
- ・しかと汝はそれをかふてきたか（「末広がり」）
- ・にくひやつめじや、しかといふまひか（「ぬらぬら」）

一例目のように打ち消し語を伴うものが六例、二、三例目のように「くか」という確認の形を取るものが二四例、他に「しかといませう」のように意志の形を取るものが一例、「しかとじや」と断定するものが一例であった。ほとんどが確認の形式、もしくは打ち消し語と呼応する形式になっていることがわかる。「しかと」を強調した「しつかと」とおりか」も一例あり、「しかと（しつかと）く確認／打ち消し表現」は虎明本で定型的表現の一つとなっている。

山本東本では「しかと」は三例しか見られなかった。その三例は「しかと見て来い／覚えております／聞かせられてござるか」という呼応になっており、「くか」という確認の形式は一例だけであった。「しかと」は強調の擬態語としてもほとんど使用されていなかった。確認の形式としては、山本東本には「ていとくか」<sup>注5</sup>という表現が七例見られた。

- ・ていとそう言うか。（「鍋八撥」）
- ・ていとお待ちやるまいか。（「二人大名」）

「ていと」はすべて「ていとくか」という形式で用いられており、虎明本の「しかとくか」に代わって確認の定型的表現となっている。

## 【つつと】

台詞部分には二〇例見られ、そのうち「つつとおくに御ざる」「つつと後にまいつて」のように時間・空間の隔たりを表すものの八例、「一口にくわへてつつとの（退）かふ」のように素早い進退動作を表すものが三例、残り九例は次に示すように「非常に」という甚だしい程度を表すものであった。

- ・つつとなみだもろひ者じや（「墨塗」）
- ・つつとはなしきじやほどに（「千鳥」）
- ・いつもしゃていくと申、是はつつとときにかかつてわるふござる程に（「舎弟」）

九例中八例が、右の一、二例目のように人物を評価する語を修飾しており、「大変、非常に」という程度表現として多く用いられていたことが窺える。

山本東本で「つつと」は一〇〇例見られた。そのうち、「つつと向こうに」「つつと古の」のような時間・空間の隔たりを表すものが三二例あり、先の「末広がり」にも使われていた「あれからつつとあれまで」という表現が八例あった。「つつと通らせられい」など「通る」「出る」「寄る」といった進退動作を表す語とともに使われるものは四五例あり、次の例に見るように、人に進退を促す場面に多用されている。

- ・イヤ申し「こう通らせられい」と申します。大名通ろうか。  
太郎冠者 つつと通らせられい。（「萩大名」）

「つつと通らせられい」一二例、「通らしめ」七例、「通れ」三例、「お出やれ」七例、「出い」五例が見られ、山本東本に

おいて進退動作に関する定型的表現になっている。

さらに山本東本の「つつと」は、虎明本に見られたような強調表現も二三例あった。

・私はつつと物覚えの悪い者で（「腹立てす」）

・名乗というものはつつとむつかしいものじゃというほどに

（「比丘貞」）

・佐渡はつつと大國じゃによって（「佐渡狐」）

虎明本では主に人物描写に使われていたが、山本東本では右の例に見るように、「非常に」という程度を表す表現として用法を広げている。

#### 【とうど】

台詞部分には一一例見られ<sup>注6</sup>、次のように使われていた。

・何と道具でまいるといふか、それにとうどつまつた（「若市」）

・又三足跡へもどつて、きりりとまはりて、とうどゐて、（「音

曲簪」）

・まつ是程なかぢみを、中にとうどおしいれて（「吃り」）

「とうど」は「つまる」が三例、「居る・入れる・おく・納める」が八例であった。「とうどつまる」は対応に窮する場面で使用される定型的表現である。また、「居る」等に使われる場合には「ゆったりと・きつちりと」という意味になる。「とうど」はト書き部分にも六例用いられており、虎明本では多用された擬態語となっている。

山本東本では「とうど」は一〇例見られた。延べ語数に対し

ての割合は少なく、多用された擬態語には該当しないが、「納める・置く・おりやれ・居よ」という語とともに使われており、虎明本の後者の用法が受け継がれている。虎明本に見られた「とうどつまる」という表現は一例もなく、代わりに次のような「ほうど詰まった」という例が三例あった。

・これに福の神ほうど詰まった。（「福の神」）

虎明本には「ほうど」は一例も見られず、山本東本との定型的表現の違いが見て取れる。

#### 【むさと】

台詞部分には四七例が見られ、虎明本で最も多用された擬態語であった。以下に例を挙げる。

・田舎者と見えて、むさとした事を申てありく、罷出て鳥目をとらふと存る（「目近籠骨」）

・太郎くわじやめが、むさとした事を云てよびたてをる（「墨

塗」）

・ぶあくが幽霊でござる、むさとそばへよらせらるゝ事は御無用で御ざる（「武悪」）

いずれも「軽率な・無思慮な・いかげんな」という意味で使用されているが、四七例のうち三四例が右の一、二例目のように「むさとした事をいう／申す／仰せらるる／ぬかす」という使われ方をしており、虎明本では一種の定型的表現になっていると言える。

山本東本では「むさと」は七五例見られた。虎明本に多かつ



た「むさとした事を言う・申す・仰せらるる・おしやる」は一六例、「誰々は」むさとした」が三六例、「むさとした（誰々）」は一三例、その他が一〇例であった。以下に例を挙げる。

・さてさてわごりよはむさとしたことを言う。頼うだ人の聞かせられたならば、ただはおかせられまいぞ。（「文荷」）

・さてさて、汝らはむさとした。御前近うくわくわらめいたとあつて御機嫌がそこねた。（「餅酒」）

・さてさて、こちの頼うだお方のような、むさとしたお方はござらぬ。（「千鳥」）

・むさとしたる草の實をつなぎ集め、数珠と名づく。（「蟹山伏」）

虎明本では、ほとんどが相手の言葉を非難する場合に使われていたが、山本東本では、言葉に限らず、相手の無思慮な行動全体を含めて、その人物を「軽率・無思慮」と評価する表現になっているものが多い。虎明本では相手の言葉に不快感を抱いたときに感情を表す語として使われているが、山本東本では軽率で無思慮という相手の性格描写として使われ、ある種の典型的な人物像を描き出す働きがあるように思われる。

#### 【ゆるりと】

台詞部分には二六例見られた。

・此間は留守にいづかひもなふゆるりとゆさんを致したほどに罷帰らふ（「樋の酒」）

・上頭へ御年貢を「あげ、われらもゆるりといたさう（「水掛」）

ゆつくりと遊んだり休んだりする場面で使われ、定型的表現となっている。

山本東本に「ゆるりと」は五六例見られるが、さらに定型的表現となっている様相が窺える。

・ここかしこを走り廻り、ゆるりと見物致そうと存ずる。（「鐘の音」）

・新發意ゆるりと慰うで歸らせられい。住持心得た。（「花折」）

山本東本では右に挙げたように「見物致そう」「休息致そう」「慰うで戻ろう」「花見を致しましょう」などの意志表現と共起するものや、「休ませられい」「慰うで戻らせられい」「花見をなされい」「ござれ」などの勧誘表現と共起するものが五一例を占めている。山本東本における定型的表現の一つと言える。

#### 三・四 擬態語(三) 山本東本の定型的表現

前項では虎明本に多用された擬態語を見てきたが、ここでは山本東本に見られた定型的表現の中から、「そろりそろりと」と、都及び神前の描写を取り上げる。

#### 【そろりそろりと】

山本東本では「そろりそろりと参ろう」という表現が多用され、計六〇曲、七三例が見られた。しかし、虎明本では「そろり」と参らふと存る（「入間川」）が一例見られるだけで、他に「参る」と共起する例が一例、他の語と共起する例が三例、合計でも五例しか見られない。「鈍太郎」「伯養」を例に、山本東本で使われている箇所を虎明本と比べてみたい。

鈍太郎

「虎明本」

罷出たる者は、どん太郎と申者でござる。へ中略へ定て待かねまらせう、急でのぼらふと存る

「山本東本」

これは都に住まい致す、鈍太郎と申す者でござる。へ中略へ、このたび都へ上ろうと存ずる。まずそろりそろりと参ろう。

伯養

「虎明本」

是は此あたりに住居致す、はくやうと申ざとうにて候、へ中略へないくそのびわをやくそく仕た程に、かりてまいらばやとぞんずる、わたくしのまひつたらは、かされぬ事は御ざるまひ、いそひでまいらふ

「山本東本」

まかり出たる者は、このあたりに住まい致す伯養と申す座頭でござる。へ中略へ今からあれへ参り、琵琶を借つて参ろうと存ずる。まずそろりそろりと参ろう

右の例に見るように、どこかに赴く設定の場合、虎明本ではすぐに場面転換を図るのに対して、山本東本では「そろりそろりと」によって時間的・空間的移動があることを感じさせる表現となっている。

【都及び神前の描写】

先に「末広がり」の例で見たように、山本東本では都の賑わいを表現する際に「つつと」「ひっそりと」という擬態語を使

い、場面描写をしている例が五例見られた。

・また田舎とは違つて、家建ちまでも格別な。あれからつととあれまで見義して軒と軒とを仲よさそうに、ひっそりと建て並べたほどにの。（「粟田口」）

神前の様子は次に挙げるように「しんしんと」を使って表現しており、計七曲に九例が見られた。

・イヤ、来るほどにはやお前じゃ。出中央へさてもさてもしんしんとした殊勝なお前でござる。まず拝を致そう。（「因幡堂」）

虎明本では「あれからつつとあれまでじゃ」と市の店が並ぶ様子を表した例が一例あるだけで、「しんしんと」「ひっそりと」は一例もない。これらは山本東本における定型的表現と言える。舞台装置のない狂言の舞台では、擬態語が情景描写に大きな役割を果たしていたのではないだろうか。都の様子も神前の様子も、擬態語を使った定型的表現をすることである決まつた舞台背景を描き出し、観衆に場面を生き生きとイメージさせる効果があると思われる。

三・五 虎明本のト書き

虎明本の場合、ト書きで感情表現や所作を擬態語で指示する例が多く見られる。感情表現には、「おぢく見る」「しつほりとなくべし」「たじくする」などがある。「びつくりとする」は台詞では三例見られたが、ト書きでは六例、加えて「びつくりびつくりとする」がト書きに一例あり、役者の感情を込めた演技の指示を擬態語によって表している。所作の表現には「ぐ

なりぐなりとする腰」「ころりころりとこける」「そろりそろりとなでる」「ひたと抱きつく」「へつたりと祈り伏す」などが見られ、動きを擬態語によってわかりやすく表現している。多用されていたのが「そつと」「七例」、「とうど」六例である。「そつと脇へのく」など「そつと」はさまざまな例があったが、「とうど」はすべて「とうどいる／いよう」と使われ、ト書きでは唯一決まった形の表現となっている。また、移動を表す語として「そろり」とはいでる。「そろりそろり」といふ。「つつとよれ」「ツルツルトヨル」「つるりつるり」とおる「などがあり、多くの擬態語が所作の指示に使われている。

#### 四 まとめ

擬音語の中でも鳥獣類の鳴き声や人の笑い声などは役者の即興的演技に依るところが大きく、特に虎明本では台本にほとんど示されずト書き部分で鳴き真似を指示していた。いかに真似を見せるか、観客の笑いを誘う重要な要素の一つであっただろう。山本東本も同様で、虎明本より多くの鳴き声が見られるものの、役者の自由な鳴き真似の余地が残っている。物音については、動作と共に擬音語を使うことで一種の音響効果の役割を果たしているが、山本東本では擬音語の類型化が見られた。例えば、大音響は「ぐわら」「ぐわらり」、それより小さい音は「さら」「さらり」で表現され、定型的表現をすることで、観客に音のイメージをしやすくさせていると思われる。

擬態語は両本で多用された語に多少の異なりがあった。本稿で取り上げた中では、例えば虎明本に多用された「しかと」は

山本東本にはほとんど見られず、「しかとくか」という確認表現が「ていとくか」に代わっている。「とうど」も虎明本で多用されたが、山本東本では用法の一部が「ほうど」に代わっており、時代による語の変化が感じられる。また、「きつと」「くわつと」「つつと」のように、虎明本で見られた強調表現としての用法が山本東本でさらに増え、擬態語の描写性が薄れた強調の用法が広がっているものもある。「むさと」は両本で多用されていたが、虎明本では相手の言葉に対する非難として使われたのに対し、山本東本では相手の人物評価につながり、軽率で無慮という典型的な人物像を思い描かせる効果がある。山本東本に特徴的だった「そろりそろりと参ろう」という表現、都や神前を描写する定型的表現は、舞台空間や舞台装置を思い描かせる効果がある。

山本東本に擬態語に関わる多くの定型的表現があり、効果的に使用されているが、虎明本ではト書きに種々の擬態語が見られ、所作の指示として擬態語を効果的に使っている。

#### おわりに

山本東本は虎明本から二百年ほど時代が下った資料であり、詞章が整理され詳細に記述されており、当然のことながら出現する擬音語・擬態語の数も種類も多い。単に数や種類が多いだけでなく、定型的表現となることで、舞台装置や音響効果等を助ける働きをしていると思われる。山本東本のような台本に至るまでにどのような過程があったのか、他の狂言台本を調査して確認していきたいと考えている。大蔵流の虎寛本や虎光本、

大蔵流と相違する台本といわれる鷺流の台本等を調査し、比較していく予定である。今回の調査は比較のための有効な一資料として使いたい。

【注】

1 拙稿「狂言台本山本東本に見るオノマトペ―浄瑠璃・歌舞伎脚本との比較とともに―」『上越教育大学研究紀要』二九卷（二〇一〇年三月発行）

2 「ちと／ちつと」「そつとも（打ち消しと呼応）」は、擬音語・擬態語としての象徴性を失っていると考え、含めなかった。山伏の呪文「ぼろおん」や、「しやつき」などの囃子詞も含めない。また、「びっくり」と対して「びっくりびっくり」とのように畳語形式になっているものや、部分的に異なるものは別語として扱った。「はつはと」と「わつはと」、「とつと」と「どつと」のように、表記上は異なるが意味が同じものは同語とした。

3 狂言の台本は固定したものではなく、台詞もその時々で役者の工夫が加わるものである。安田（一九八一）に「まねしぐさを補う擬声語・擬態語としてのことばは文字化されていない」「文字化されなかった多くの『事物の音響・挙動までも示すもの』（日本大文典）が、狂言にはあつたはずである」とあるように、台詞に書かれていなくても役者が表現していた可能性はある。しかし、本稿では台本に表現された擬音語・擬態語を対象に、その特徴として捉えていく。

4 他に「もんのとびらに手をかけ、さらりくとな（撫）つれ

は（「朝比奈」）があるが、擬態語と判断した。

5 大系本の注には「日葡では「と」が濁音である」とある。

6 「どうど」「どうと」という擬態語も見られるが、今回は別語として扱った。

【引用・参考文献】

池田廣司一九六七『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』風間書房

北川忠彦一九七〇「狂言の性格」『日本の古典芸能4 狂言』平凡社

小林賢次二〇〇〇『狂言台本を主資料とする中性語彙語法の研究』勉誠出版

小山弘志一九六〇「解説」『狂言集 上』（日本古典文学大系）岩波書店

小山弘志一九七七「狂言の固定」『謡曲・狂言』（日本文学研究資料叢書）有精堂

小山弘志・田口和夫・橋本朝生一九八七『岩波講座 能・狂言』狂言の世界』岩波書店

佐々木峻一九七一「大蔵流狂言資料における擬声擬態語彙について」『広島大学教育学部紀要第一部』二〇号

蜂谷清人一九九八『狂言の国語史的研究―流動の諸相』明治書院  
安田章 一九八一「狂言の語彙」『中世の語彙』（講座日本語の語彙4卷）明治書院

柳田征司一九九一『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院

（上越教育大学准教授）